

海、まち、山を結び、地域に新たな生業を生み出す「里の駅」

都市交流施設として地域経済を支える拠点に生まれ変わるために

00. 体育館を「市場」に、学舎を「宿」に、校庭を「花の原っぱ」に

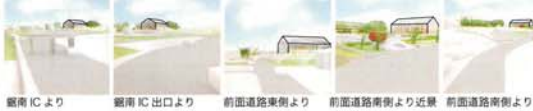
鹿南町は穏やかな里山と黒潮の海に恵まれ、しかも東京・横浜・千葉に近く、願ってもない好立地を持っています。そこに、日頃から町民が楽しく集い、房総の生活を賑やかに楽しむ「里の広場」をつくりたいと考えます。地域の皆さんの思い出の詰まった学舎を、客をもてなし、自らも豊かに暮らす、地域の新たな生業の拠点といたします。古きを伝え、新しきを知り、人々が触れ合いながら共に「里の暮らし」を満喫する、次世代型の道の駅を目指します。



角屋根の玄関口として、ランドマークとなる建築

01. 体育館は「大きな温室」に、長狭街道の新しいランドマークとなる

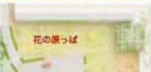
館山道保田ICを出て、本施設がすぐに目にとまるように、体育館は骨格だけを残し、農業用の既製アルミ部材を利用して大きな透明温室へと転用します。「海」の「ばんや」と一対をなす、「山」の「里の駅」のシンボルとなります。温室の風景は地域の花卉栽培に馴染みの深いものであり、花畑に変身する校庭と共に、街道の観光客を引き込む大きな目印となります。既存校舎の正面には、鉄骨フレームによる「緑側空間」を増設して、体育館と一体化してつながる表情を生み出します。それと同時に緑側は、植物のスクリーンや水平ルーバーなどによって夏の直射を遮り、冬には温かい日溜まりを生み出します。壁面の緑は安価な自動冠水装置によって維持できます。体育館と向き合う東側の新しい新築棟には、24時間トイレと2階に大浴室を設けます。



周辺環境と調和した魅力的なランドスケープの提案

02. 建物前面に、子供たちが走り回れる「花の原っぱ」を

前面道路から緑側までの校庭部分を使って、千葉の野草を主体とした「花の原っぱ」をつくります。所々に花畑も設けますが、全体はもう少しワイルドに、小さな子供たちが喜んで走り回る、一面に小さな草花の咲く原っぱのイメージです。温暖な気候がほぼ一年中花を咲かせて、南房総の自然を表現してくれます。駐車場はすっぱりその中に包み込まれます。屋外キッチン、燻製小屋、夜空を映す星空テーブルなど、鹿南の食を楽しむ大きな庭ができあがります。



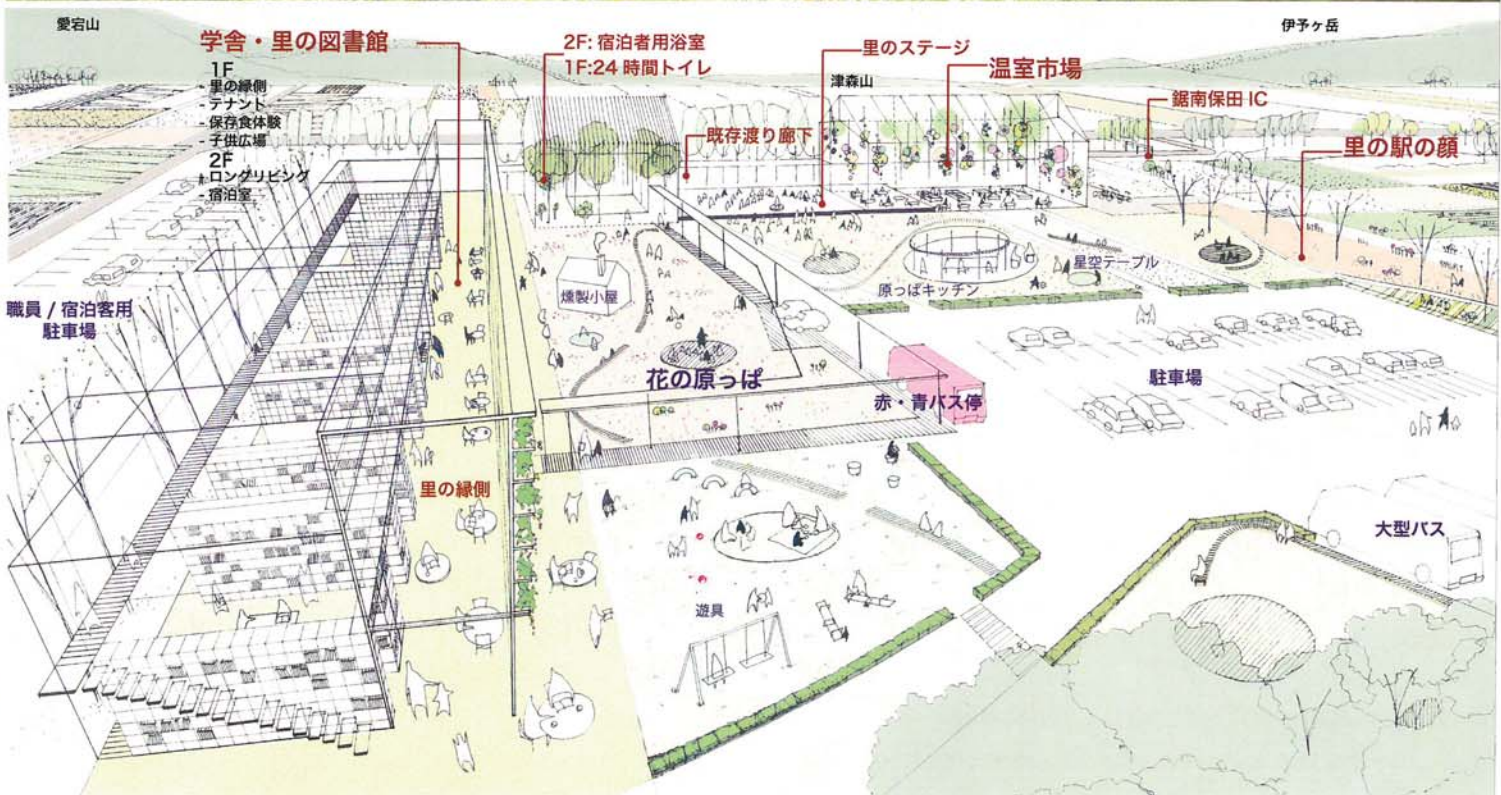
各種サービスの提供施設としての提案

03. 「市場×レストラン」が提供する「鮮度」と「保存」のふたつの食

ここでは数多い近隣の道の駅とは、ひと味違ったサービスを提供しましょう。保田小学校を文字通り「保存再生」するこの施設では、鮮度の良い食材とその保存をテーマとした、里の文化に基づいた独自性をもたせます。既存の周辺施設とは競合せず、むしろ連携による相乗効果を生み出します。魚の燻製、果物ジャム、プリザーブドフラワーなど、地域の産物を素材にさまざまな保存法を知り、味覚を実体験できます。さらには南房総の玄関口ですから、千葉ザボーク（燻製）、チーズ、落花生の燻製など、幅広い房総の産物を扱うことも考えられます。現体育館である「温室市場」には、鹿南町の野菜や花を集め、そこで買って、その場で食べられる場内食堂を併設します。温室天井からはフラワーボールが下がり、花に包まれた食と市の空間をつくります。



南側前面道路から眺める



小さな子連れにむけて魅力ある施設にする提案

04. 子連れで、遊ぶ、学ぶ、食べる、が楽しく体験できる

駐車場と区分され車を気にせずに遊べる「花の原っぱ」には、小学校の遊具を再利用した遊び場を設け、校内の「子供広場」と併せて、屋内外にさまざまな遊びの空間をつくります。「原っぱキッチン」では、農業体験で子供たちが収穫した野菜を調理したり、試食したりすることができます。また校舎2階の宿泊施設へは、ベビーカーでも上がれるエレベーターがあり、緑側の2階部分となる日当たりの良い「ロング・リビング」では、房総の山々や原っぱを眺め、親子がゆっくりくつろげます。

交通拠点及び情報拠点として、町内外から来客や町内への送客に寄与する提案

05. 地域の人々と観光客を結び「里の駅・里の図書館」

校舎1階には、地域住民と観光客の交流を促す「里の図書館」を提案します。町民図書館と道の駅が一体となることで、「本」が人々を結びつけ、交流のきっかけを生み出します。日頃は地域住民同士の交流の場ともなりますが、グリーン・ツーリズム、ブルー・ツーリズムの案内所も置かれ、観光客に対しては、町民すべてが地域文化の「案内人」になることが出来ます。「里の駅」が、ひろく南房総観光の起点となります。市場やレストランでの地産野菜の直売、保存食体験などが「6次産業」を創出し、2階の宿泊施設によって、都会と地域の両方の生活を可能にする2拠点居住の促進を図り、都市住民の1次産業への参加を促す未来社会に寄与します。循環バス（赤・青バス）の乗り入れを行うことで、町民の活発な利用を促すと共に、地域資源情報データベースの開示・閲覧や、DSRC（スポット通信）を用いたITSスポットサービスを導入し、交通情報や地域の魅力を発信するコンテンツを作成するなど、交通・情報発信の拠点としても位置付けます。

事業予算に適合させるための予算配分や価格低減の工夫についての提案

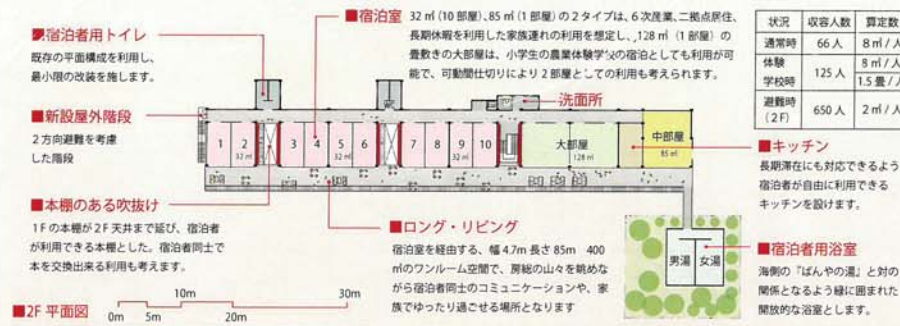
06. 設備更新部分の集約化による、適材適所の予算配分

「温室市場」の外装は、農業用の既製部材を利用することでコストを抑えつつ、イメージを一新します。校舎本体は耐震改修済みなので、平屋部を撤去する以外は、主構造は保存活用します。小学校の面影を極力残す為に、内装も最小限の改装にとどめます。南側の「緑側」の増設により、上下の動線や交流空間を生み出し、同時に室内環境制御を行います。建物全体は用途変更に伴う法的な設備改修が必要になりますが、設備は増築部分に集約的に計画し、既存校舎床下などの大規模な改修を回避します。24時間トイレや宿泊施設の浴室等、新設設備工事の比重の大きい部分は、費用の合理性や快適性を勘案し、別棟として増築します。

07. 「5つの大学」が協働する住民ワークショップ・竣工後の運営サポート

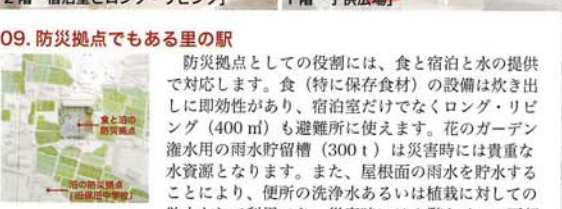
このチームは協働による廃校の再生活用経験のある、複数の大学研究室の参加が特徴です。過去の事例からしても、住民間の合意形成やキーパーソンの発掘には大学チームがサポートする「住民ワークショップ」は効果的です。竣工後も運営事業者と協働し、また参加大学を地域に拡大して、継続性のあるサポート体制をとれるのも他にはない特徴です。代々新しい学生が加わっていくことで、毎年新しい提案を生み出す「イン・プロGRESS」(常に進行中)の施設運営が可能となります。

ワークショップスケジュールイメージ



08. 豊かな自然を活用したエコロジカルな環境設備

小学校は他の建物より窓面積が大きいことから、店舗や宿泊施設に転用したときに、自然通風や自然採光を取り入れやすく、機械換気や人工照明の稼働時間を縮小することができます。また、外壁面には水平ルーバー、グリーンカーポートと自動灌水装置を利用し、植栽の登はん補助として漁網を用いた壁面緑化により、夏の日差しを遮り、冬の日差しを積極的に取り込みます。1階土間空間の下に蓄熱層を設け、さらにリターンダクトを併用する事で冬の暖房負荷をおさえます。夏には重力換気やナイトバージの利用により冷房負荷をおさえ、1年を通じて省エネルギー性の高い施設とします。



09. 防災拠点でもある里の駅

防災拠点としての役割には、食と宿泊と水の提供に対応します。食（特に保存食）の設備は炊き出しに即効性があり、宿泊室だけでなくロング・リビング（400㎡）も避難所に使えます。花のガーデン灌水用の雨水貯留槽（300t）は災害時には貴重な水資源となります。また、屋根面の雨水を貯水することにより、便所の洗浄水あるいは植栽に対しての散水として利用でき、災害時には1階トイレの下部など配管ピットを排水層に転用し、貯水した雨水を利用して、トイレの使用が可能となります。

10. 構造計画
既に耐震補強が実施された学校の構造体をそのままに残す建築計画です。したがって、学校は教室間の耐震壁を残しながら開放的で自由な空間をつくり、体育館は既存の仕上げ・下地材を解体減量して新たな仕上げを付与し大きな空間を活かす計画とします。